

会 議 結 果 報 告 書

令和7年8月5日

会議の名称	令和7年度第2回社会教育委員会議	
種別	☒ 附 属 機 関 ☐ 懇 話 会 等	
開催日時	令和7年 8月 4日（月） 13時30分 ～	
開催場所	舞鶴市役所 別館4階中会議室	
出席者	社会教育委員9名（1名リモート参加） 生涯学習部長、生涯学習推進課長、事務局（3名）	
議題	報告 中丹・京都府社会教育委員連絡協議会総会について 協議内容 （1）自己紹介 （2）公民館ヒアリング中間報告（江上委員） （3）公民館長との意見交換 その他 （1）近畿地区社会教育研究大会（和歌山大会）について （2）日星高校 探求授業の参加について （3）次回日程について	
公開の区分	☒ 公 開	
	☐ 部分公開	[理由]
傍聴者数	2 名	
審議結果 及び 主な意見等	公民館長と「公民館職員として求められるスキル」について意見交換。 公民館の現状や課題を議論しながら、公民館の職員として「地域を知る」ことの重要性が強調された。	
会議録の作成様式	☒ 詳 細 ☐ 要 約	
備考		

担当課	舞鶴市 生涯学習部 生涯学習推進課 TEL (0773)68-9223
-----	--

令和7年度第2回社会教育委員会議事録

第2回社会教育委員会議概要

○開催日時 令和7年8月4日（月）13時30分～16時30分

○開催場所 別館5階 中会議室

○出席委員 福原委員、谷口委員、阿部委員、江上委員、鈴木委員（リモート）、
田中委員、波多野委員、吉岡委員、渡辺委員 計9名

○公民館長 有吉館長、川崎館長、岸口館長、岸本館長、濱野館長、福本館長 計6名

○事務局等 生涯学習部福田部長、生涯学習部森次長（生涯学習推進課長兼務）
生涯学習支援係 森野、山本、仲嶋

1. 開会

○福原会長

本日は社会教育委員会議に参加いただきありがとうございます。また、公民館長におかれましても、公私ともにご多用のところご出席いただきありがとうございます。本日は館長との意見交換の機会なので人材育成などについて話したいと思っておりますので、よろしくお願いします。

2. 報告事項

事務局より

【中丹地区社会教育委員会総会について】（6月10日 舞鶴市にて）

福原会長、谷口副会長、阿部委員、田中委員、渡辺委員に参加いただいた。中丹地区の役員体制が決まり、福原さんには副会長、谷口さんには理事としてお世話になる。議題としては決算及び予算の承認の他、桃映地域の公民館長、渡邊氏に「地域交流が深まる公民館を目指して～合わせよう顔と顔 つなげよう心と心～」をテーマに講義していただいた。館長が地域の学校教員であったことから、地域自体、地域の人たちのことをよくご存知で、地域の方が講師の講座を開設したり、地域を題材に講座を開設したりするなど、地域の交流を深めるという視点で事業を展開されている。地域の一人ひとりが楽しむことに加えて、みんなと一緒に楽しいと思えるように事業を進めている。

【京都府社会教育委員会総会について】（6月27日 長岡京市にて）

福原会長と渡辺委員に参加いただいた。議題としては決算及び予算の承認の他、一般財団法人明石コミュニティ創造協会事務局次長の上木氏に「これからの地域・社会で目指す、学び、活動のかたちとは」というテーマで講演いただいた。協会としては明石市の生涯学習、男女共同参画、市民活動支援の3機能の複合施設の指定管理を担っている。地域住民同士や住民と学校が

ながるために対話、学び合う場の提供を事例を通して話されていた。自分の楽しみを見つけた中から他者にも伝え貢献する楽しみになればという事業展開をしている。ここでも楽しむという視点で事業企画されていた。

【総会に参加した社会教育委員より感想】

(中丹地区社会教育委員会総会)

○田中委員

館長の地元愛を感じた。

○阿部委員

館長の前職が校長先生とのことで納得がいった。事業の課題設定がとても良く、その校長としての経験が活きていると思った。

○渡辺委員

講師の館長が背中のかゆいところに手が届くような施策をされていた。みんなでより良いものにするために取り組んでいた。理解しやすい事業内容が印象的だった。

○福原委員

学校での経験を館長として活かしている。人と人をつなげるということを大事にされていて、新たな取組もされているので、このような場を使って皆さんにフィードバックしていきたい。

(京都府社会教育委員会総会)

○渡辺委員

振り返りが2点あり、1点は職員みんなでその取組に応じて具体的な施策を練っていること、もう1点がそれぞれの目的には地域性や年齢を踏まえた上で取り組みを進め、さらに参加者の年齢に合わせてアニメーション的なキャラクターを使うなどの工夫がなされていることが良い点だった。

○福原会長

講師の方はまだ若いのに中心となって細やかな取組をしていた。コミュニティセンターの中で地域の方々と繋ぎ、地域と学校とが繋がるための取組などの事例発表をしてくださった。何か取り入れられるものはないかと思った。次年度以降もこのような研修があるので都合が付けば参加いただきたい。

3. 協議内容

(1) 自己紹介

○濱野館長(中公民館)

中公民館は5階建ての大きな建物にある。公民館の他にもいろいろな施設があり、公民館のイベントに来られる方の他にも、こども家庭センターに健診に来る方など様々な用途で市民が来館される。今年度1階ロビーに若者の居場所づくりを計画している。Wi-Fiを設置したり、椅子を置いたりすることを検討している。令和10年度には中舞鶴の保育所が建物の南側に建設されることから、今後若者に向けた公民館運営をしていく。

○福本館長（まなびあむ）

まなびあむは東公民館、老人福祉センターを複合した施設で、公民館条例ではなく多世代交流施設条例に基づいた建物。民間事業所も入っていて、入居事業所とコラボした事業も実施している。比較的街中にある施設で、エリアで言うと概ね白糸中と志楽地区だが、かつての東公民館よりもさらに街中にあるので志楽地区の住民からは「我が公民館」という意識が低いように思う。

○有吉館長（南公民館）

地域性の強い公民館。月に2000人の利用者に加え、夏休み期間は小中学生も多い。毎晩のように地域の会合が開催され、南舞鶴女性の会などの地域団体の集まりが開催されている。生涯学習部としての組織上、東図書館の南分館としての役割もあり、4千冊の図書がある。市役所の倉梯出張所にもなっていて、市民環境部の業務も行っている。

○岸口館長（加佐公民館）

加佐公民館長としては2年目で、加佐分室時代から合わせると4年目。加佐地域活性化センター、加佐公民館、加佐分室があり、3つが分け隔てなく活動している。加佐分室は加佐の市役所といったようなもので窓口業務をしており、活性化センターは地域の課題解決に取り組んでいる。遠いので9割が車で来館しており、ふらっと立ち寄れる公民館ではない。どうにか人に来てもらえるように毎日考えている。昆虫展、星空観察会など自然系の事業が多い。

○川崎館長（大浦会館）

大浦館長として2年目。今までは大浦在住の館長だったが、自分は大浦出身でなく、2年目でやっと慣れてきた。大浦の人口は1600名ほどで、加佐と同じように非常に遠い。陽圧装置があり、原子力災害時の避難所となっている。放課後児童クラブがあり、夏休みも毎日15名くらいの子供が児童クラブに来ている。地域の住民同士が近い地域。交通の便が良くなく、人に集まっていたくのが難しい。

○岸本館長（城南会館）

4月から城南会館の館長になった。ホール、会議室、料理室、工房、和室など貸館としての部屋が5つしかないが事業をたくさんしている。小学校が近くにあるので小学生がよく遊びや勉強にきている。芝生広場があり、BBQやグランドゴルフの利用がある。事務所に地域包括センターがあるので高齢者対象の事業を一緒にしたりしている。近所の地域からこどものまつりを城南会館でしたいとの申し出もあるなど、地域密着型の公民館で愛されていると感じる。

○福原会長

社会教育委員としては6期12年目で、会長としては8年目。地域やPTAからの叩き上げでここに来ているので、社会教育を勉強しながら前に座っている。

○谷口副会長

社会教育委員としては8期目。南公民館エリアで子育て支援事業をしていて、以前は高齢者向け事業もしていたこともあり、公民館全館で事業をしたことがある。社会福祉学科を卒業していて、地域福祉の勉強をしている。社会教育主事の資格も持っているので、社会教育や地域づくりに興味がある。

○阿部委員

一般公募で社会教育委員になった。社会教育委員としては3期目。前職は中学校教員。

○江上委員

大谷大学で教授をしている。社会教育委員としては4期目で、福知山公立大学時代に社会教育委員になった。資料をまとめたり分析したりしている。

○田中委員

社会教育委員としては4期目。文化協会の役員もしている。大正琴、堅琴をしていて公民館にはお世話になっている。お役に立てることは分かる範囲でお話させていただきたい。

○波多野委員

中筋小学校の教師をしていて、社会教育委員としては1期2年目。

○吉岡委員

日星高校の教頭をしていて、社会教育委員としては1期2年目。高校生の時代が大切な時間で、高校生に舞鶴の良さを知ってもらうことで舞鶴が好きになり、舞鶴のために役に立ちたいという子どもたちが増えたら良いと思う。子どもたちに感情が揺さぶられる原体験をしてほしい。

○渡辺委員

社会教育委員としては3期目で、スポーツ協会から来ている。

○鈴木委員

京都府立大学京都未来創造センターで勤務している。社会教育としては1期2年目。以前、大浦で市民に地域づくりのアンケートを取ってから舞鶴には時々足を運んでいる。専門は多文化共生の分野で、外国人とどう共生していくかというフィールドで研究をしている。

(2) 公民館ヒアリング内容中間報告（江上委員より）

- ・文字起こしソフトを活用してどのような言葉が多かったのかを分析した。話の中にどんな言葉が多かったかを図にした。一番多かったのは「地域」「知る」という言葉だった。公民館ごとの性質によって差は出てくるが「地域を知る」という言葉が共通点だった。どんな地域かを知るために、歴史を学ぶ、地図を見る、団体の種類、キーパーソンとなる人を知る、地域内の協力者を見つける、住民が何人いるのかなどの地域の基本情報を知ることが大事。
- ・公民館の中でも職員同士が会話をして情報を共有したり、他の公民館ともいろいろな情報共有をして知っておくことも大切なこと。
- ・前任の館長さんが地域にすることから、その方に地域のことを教示してもらう館長がいたり、館長会議も情報共有の場になっている。来館者や地域住民に聞くことで住民のニーズを知ったりしているという話もあった。
- ・チラシなどを配布するにしても、単純に郵送や電話するだけでなく自分で住民の家まで持って行ったり、事業においても必ず講座に顔を出したりして顔を覚えてもらっているという話もあった。

・地域を知ることが大切と分かっているがなかなか難しいこともある。その中で情報共有しやすいという体制が大切。今の主な情報共有方法は館長会議や職員同士の交流（担当者会議）、チャット機能、本庁へ電話、前任者への相談といったことが多い。勤務体制が課題で、チャット機能は使っているが本音を引き出すことが難しい。年度の引き継ぎでは事務的なことだけでなく、地域性に関する情報の引き継ぎも必要。

・公民館職員のスキルアップもした方が良いが、会計年度職員が多いことから何年も先を見据えた研修を組みづらい。地域を知ればあとは実践するのみ。失敗を恐れずになんでもやってみようという話もあった。

今回は以上のように話題提供くらいで資料をまとめた。

（３）意見交換

Q. 阿部委員より

公民館だよりを見ていると様々な講座を開いているが、この講座を設定した理由または何をもとに設定しているのか。

A.

○濱野館長

コロナ禍が明けた頃の令和４年から自主事業を再開したが、昔ながらの講座が多かった中で、男性も女性も参加できるような今どきの講座内容に新しく刷新した。最初は人集めに苦労し、特に男性の参加者が少ないので職員が頑張って声をかけ、なんとか定員に達するといった状況だった。以前だと少なくともそのままだったが、少ない時にどうするのかといったことを職員に経験してほしいと思っている。スタンドグラス講座はすぐに定員に

達すると思っていたがなかなか集まらなかった。春から秋までの講座を設定をし、長期的に毎回参加してほしいということだったのが原因だったのではないかと考えた。その反省から先を見据えるような講座設定はやめようと思った。このような経験をもとに事業を企画している。

○岸口館長

運動体操、古道を歩こう野外ハイキングなど、自然にまつわる講座設定をしている。毎年２０名から３０名の応募がある。

○岸本館長

今年の事業の半分は前館長がやっていたものが多い。前職が福祉関係で、その経験から、健康なうちにみんなが顔を合わせることが大事だと思い健康講座を考えている。子ども、男性の参加者が少ないのが気になっているので、多世代が参加できるような講座を考えている。

○阿部委員

行ってみたいと思う講座がない。もし自分が公民館長なら地域の課題を解決するための講座を考えるだろうと思った。地域の課題にも目を向けてほしい。

Q. 吉岡委員より

江上委員への質問になるが、抽出リストを見ていると、16位「学校」35位「高校」39位「大学」42位「小学校」があるが、中学校がないのが気になった。

A. 江上委員

「中学校」は順位は低いですが50位くらいにある。言葉として多かっただけなので、地域連携で「小学校と」「高校と」という表現として多かったのだと思う。まだ全部整理しきれていない部分がある。

Q. 吉岡委員より

館長の話にもあったと思うが、高校生が公民館に行くためには足が必要。地元が加佐だと加佐に行く。他の公民館に参加しようと思うと交通の便が悪い。何か手立てがないのかなと思った。

A.

○川崎館長

大浦会館に来る高校生は大浦地域の中でも少ない。自転車を置きに来るくらいで、交通の便は公民館に来る以前の問題。

○福本館長

昨年度から空き部屋を自習学習スペースとして開放している。白糸中学校、東舞鶴高校に話に行ったが、東舞鶴高校は空き教室が多いので勉強スペースは足りているとのことだった。舞鶴高専は土日に開放してほしいとのことだったが、貸館や勤務体制の関係からまだ実現できていない。夏休みに入ってから白糸中学校の生徒がたくさん来るようになった。勉強する、しないはいろいろだが、館内が涼しいので居心地よく過ごしているように思う。子どもだけでなく大人でも涼みに来る。事務所を通らずに3階などの上の階に行けるのでそこで大人がゆっくりされていることもある。

Q. 渡辺委員より

会場が館内で、手軽な運動をされていると思うが、自分の経験からも昼間だと高齢の方や女性の方が多い。土日に実施するなど、若い女性の方などが来る工夫はされているか。

また、男女比も知りたい。

A. 有吉館長

骨盤底筋を鍛える講座は性別関係なく募集しているが圧倒的に女性が多い。ターゲットとする年齢層を対象とした事業を実施するためには職員が足りず、公民館だけで検討することは難しい。子育て世代を対象にすると、その間子どもを見てくれる人がいなかったりするのでこういったところのニーズも意見を聞いていかないといけない。価値観の多様化などに対応するような事業を検討していく必要があると感じている。

Q. 福原委員より

資料の定期講座の開講状況の色付けの違いは何か。

A. 森野係長

赤色になっているのが開講できている講座、その他は募集したが5名に満たなかった講座。

Q. 福原会長より

土曜日の開講という話も出たが、城南はどうか。

A. 岸本館長

モーニングヨガなど働く前の時間に設定したり、夜間に設定したりと時間をずらしてニーズに合わせるようにしている。

Q. 福原会長より

数多くの運動、体操の事業をしている中公民館の状況はどうか。また参加者の男女比率は？

A. 濱野館長

平日の日中の講座が多いので女性が多い。公民館事業は老人会、婦人会を対象にしてきた経緯があり、高齢者向けの講座を開催してきた。その方々が部屋を借りて趣味の講座を開いているが、高齢化が進んでいる。下の世代に参加していただくために、若者向けの講座や男性向けの料理講座など、内容を考慮したり土曜日の日中など参加しやすい時間に設定するなどを行っている。

Q. 田中委員

公民館の定期講座は初心者対象だと思うが、講座が終わった後にサークル活動に移行する方は多いのか。

また、若い世代の方々は働いているので休日や夜間の方が参加しやすいが、そのような講座は考えているか。

A.

○有吉館長

定期講座に参加されていた方の意向を尊重して、人が5名以上集まるようであればサークルに移行しているが、こちらからサークル活動をお願いはしていない。昨年度に定期講座で開催されていた講座から、今年度2つサークルに移行している。土日、夜間の講座は公民館の人員体制が整えばできるが現状難しい。公民館の職員が講師をするのが難しいので、講師をしていただける人がいるのかどうかの調整も必要。

○岸口館長

サークル活動は少ない。土日祝や夜間にしている講座は参加者が多い。若い世代向けの講座については、ふれあい学級をしていて、毎年赤ちゃんなど小さいお子様を育てている方を対象にしている。去年は体操など定期講座で8回実施した。かつてふれあい学級の参加者だった方が今講師をしてくださっているものもある。

Q. 波多野委員より

小学生の子どもたち向けの講座は、保護者同伴や交通の便など難しいところがあるが、どれぐらい参加しているか。また、参加しやすいようにどのような対応をされているか。

A. 川崎館長

小学生対象の海の生き物観察会や親子工作教室を実施しており、保護者の送り迎えで30名程度の参加がある。パン作り教室にもたくさん参加がある。

Q. 波多野委員より

子どもだけでの参加は難しいのか？

A.

○川崎館長

地元の子は来れるが、バスも1時間1本来るかどうかなので遠方の子どもは難しい。また、海の観察会だと危険もあるので、子どもだけの参加というのは大浦の場合は難しい。

○有吉館長

子ども料理教室では申し込みは保護者と一緒にするが、講座中は子どもだけでしている。遠方からの参加は難しいので、近隣の小学校の4、5、6年生を対象にしている。

○福本館長

料理教室やスイーツデコ教室を開催していて、小中学生を対象としているが、小学生が多い。低学年は保護者同伴だが、高学年、中学年は子どもだけで参加していることも多い。

Q. 鈴木委員より

江上委員に質問で、公民館職員の求められるスキルとして調査をする中で「地域を知ること」を考察しているが、講座に参加されている方を巻き込んで担い手を育てていく、参加者の自主性を引き出すといった観点はあったか。なかったとすれば、今後そのような観点は出てくるのか。

A. 江上委員

地域住民を積極的に巻き込む、協力してもらおうという話も出ていた。今回のまとめ方は、「地域を知る」ということを答えている人が多かったことと、公民館職員のスキルはいろんな要素があるので、まずは切り口となるスキルに係ることとして、「知る」ということに着目し、今回のようなまとめ方をしている。公民館職員の人材像を考えるにあたって、今回の視点のようなまとめ方で良いか尋ねたい。

○鈴木委員

何を起点に膨らますのかなと思っていたので、今回の意図は理解できた。

Q. 谷口委員より

若い世代の話の中で加佐公民館のふれあい学級の話が出たが、自分が加佐に住んでいた頃から、ふれあい学級は現役の参加者が運営をされており、地域を巻き込んで実施されているので自分が子どもを連れて行った時も、歴代のお母さんたちとの繋がりができた。昔は乳幼児の家庭教育をいろいろな公民館でしていたが、加佐だけは参加者がスタッフになっているので、居心地が良く、有用感が得られて地域外に住んでいてもどんどん受け継がれている。他の公民館が、同じ形で続いていないことが悪いという訳ではなく、民間の子育て支援団体が公民館で実施する形になっており、その形もありだとは思いますが、公民館として事業に対してどうテコ入れしているのか、同じ内容を公民館でやっていて良いのかと以前投げかけたことがある。定期講座はあくまでも初心者の方を対象にしている物が多いが、行っている方、参加されている方をどれだけ巻き込んでいるのか、サークルへの促しはどのようにしているのかを知りたい。

公民館は主体的に生きていくためには人が集まる。人数が多いから良いのではない。公民館の自主事業を残している中でカルチャースクールとしてではなくどのように公民館が我が場所として感じられるように促しているのか。

A.

○濱野館長

定期講座は公民館が主体となっているのではなく、基本的に地域の方々に自分たちで運営してもらっている。最終的には主体的に自分たちの活動として育っていくという流れだと思うが、実際は講師に任せっきりで、あまり関わっていないのが実情。公民館の職員も1 年目、2年目の職員も多く、そこまで思いを巡らせられていない。

○福本館長

定期講座はエリア内の方が講師になっているものが多い。地元の方が地元で教えている印象が強く、それが発展してサークルになっている。定期講座ではないが、自主事業の延長で自主的なサークルになっているものもある。

○有吉館長

究極の理想は住民自治の推進が地域の活性化につながると思っている。ただ、住民同士をつなげる団体自治は行政の仕事で、定期講座はそれを促すきっかけでしかない。一方で、カルチャースクールとの違いは、集金役、会場の設置役などの当番を各講座内で作ってもらうようにしている。住民自治と団体自治の役割を分けて機能させ、その延長で住民自治に繋がればよいと思う。

○岸口館長

どうしたら継続的に来ていただけるのかを常に悩んでいる。ふれあい学級で参加した時に興味を持った講座に参加されたりしている。加佐の場合は人数が少ないので住民を巻き込まないと成り立たない。課題についても一歩踏み込む必要があると考えている。

○川崎館長

定期講座を開設しているが、なかなかうまく行かない。副会長が言われるような目的でやろうと思うと、定期講座では難しい。自主事業を複数回でやるなど、他の方法を検討するべきだと感じる。

○岸本館長

定期講座はある程度人数が集まっていて、講師をしてくださる地域の方々が一定数いる。隣に住んでいる人が何をしているかわからない時代だから、健康なうちに人と人が顔を合わせる事が大事だと思う。介護予防のサロンをしていた時に、最初は健康寿命を伸ばすことを目指していたが、ある時災害があり、サロンで出会った人はどうなったかを気にする事があった。誰がいるのかを知ることができれば、繋がりができていく。カルチャースクールとの違いは何かと言われたら同じようなこともあるが、全く無意味ではないと考えている。

Q. 江上委員

公民館職員のあり方、必要なスキルを整理して、現場で活かせるものを作りたいと思う中で、皆さんの中では「地域を知る」ということが重要だと感じていると思うが、違和感や重要な点、資料に追加すべきことなど意見はあるか。

A. 有吉館長

自分で歴史を紐解いたりして「地域を知る」ということをツールに、職員と地域の人がコミュニケーションを取ることは良いと思う。知らないことで話しにくい関係性であるなら、コ

コミュニケーションを取ることは難しいと思う。興味深く中間報告を読ませていただいた。

Q. 江上委員より

公民館職員として第1にどんな能力が必要なのかを考えた時に、頼りになる人を知る、地域性を知る、人を知ることが必要だと考えたが、このようなまとめ方でよいのか率直な感想を聞きたい。

A.

○岸本館長

城南会館は地域の人が密着しているので、地域の方が自分の館として使われている印象。知り合いが多く話しやすい人が多いが、その人はどんな人なのかということを知り、寄り添うことが大事になってくる。お年寄りの方がスマホの使い方がわからないなど地域の悩みをどのようにして事業展開をしていくのかを考えている。地域のニーズを聞いて実施する事業と、人が集まることが目的の事業とのメリハリをつけるべきだと思っている。

○岸口館長

自分も加佐出身ではないのが致命的だと思っていて、加佐分室の職員に加佐出身が何人いるのかが重要になってくる。地元出身の職員は事情をたくさん知っている所以、その方々に聞きながら地域課題を見つけている。地域へ踏み込む際に少し難しいと感じる部分がある。

○江上委員

地域を知るために障壁になっていることを考えると、ベテランの職員がいればよく知れるというところがある。

○吉岡委員

6月の探求授業で岸本館長に来校してもらった。eスポーツの講座に参加する生徒は0名だったが、それ以降2チームが城南会館を訪ねている。城南の地域のイベントの役割を一部、生徒が受けてくれたという報告ももらった。学校からの距離的には西公民館の方が近いが、自転車に乗って城南会館に相談に行った。それは岸本館長が学校に来てくださったことをきっかけに人を知ったからである。話の始まりだったeスポーツとしては関わりはなかったが、そこで会ったことをきっかけに話が広がっているので、まなびあむに人が涼みに来ていることも、今後の繋がりへのきっかけとしてとても重要なのかなと思う。人をつなげていくことが公民館なら、このような小さなことからどんどんつながっていける。

Q.

○阿部委員

公民館としての役割を十分理解されている方が前に座っている。運営委員の体制はどうなっているか。地域のキーパーソンとなる方をお願いするなどすれば、状況も変わるのではないかなと思う。地域の中のメンバーチェンジをすると刷新していけるのではないかなと思う。自分の地域に外国人の方が住まれており、地域と外国人をつなげるような講座も実施してほしい。

A.

○川崎館長

運営委員会については、人は変わっていて停滞しているところもあるが、地域のこれからの担

い手を育てるにあたって、大浦地域活性化センターでしている夢プロジェクトなどを行いながら、形を変えて進めている。

○福本館長

まなびあむを設立する際の条例の中で公民館運営会議というものができていない。地域性が薄いので、どうしたらみんなが自主的にできるのかが難しいが、まずは公民館運営会議の設置をすることが課題。

○岸本館長

国際交流協会MIAに知り合いの方がいて、餅配りやパーティに参加している。他にもMIAのイベントと一緒にやったりしていて、特に尺八が外国人には人気がある。運営委員は今年一新し、PTAの方がなってくれた。とても前向きな方なので、こういう方が入ってくれると積極的に前に進んでいき、公民館が主体となることは減ると思う。夏休み企画ではみんなで流し素麺をして、盛り上がった。

Q. 田中委員

綾部の公民館にも行っているが、綾部は昼休憩の時間はカーテンを閉めて窓口対応をしてくれないが、舞鶴の公民館はきれいで、花を飾っていたり、昼休みも対応してくれるので舞鶴で良かった。チラシもかわいくてよい。まなびあむでのボクシング講座が斬新だった。女性も入って良いのか。

A. 福本館長

ボクシング講座は女性でも受講が可能。去年まで3年連続で女性限定の時もあった。ただ、3年目になるので、少し形態を変えてもいいかなと思っていて、単発の講座でできないか講師の方に交渉中。

【感想・所感等】

○波多野委員

放課後児童クラブの利用があると言っていたが、暑さがあるので、その中で涼しい居場所があることが素敵なこと。子どもへの場の提供が行われていることに安心した。貸館の一部を子どもたちに開放するなどしており、大人の目が届く場所で遊べる環境は大切なことで、子どもたちにとっても良い影響がある。

○吉岡委員

子どもたちにとって公民館は安心安全な場となっていて、場として公民館はとても重要だと思う。高校生としては運営側をやってほしいと思っているが、子どもたちが何に興味関心があるのかわからないので、もしも何かの講座に興味を持った高校生がいればお手伝いをするという形だと嬉しい。

○渡辺委員

スポーツ協会としては幼少期のスポーツ体験が、また舞鶴に帰ってきたいと思えるきっかけになると考える。人数ではなく、「こんなことを学んでほしい」といったように思いを持って事業を展開してもらえると嬉しい。公民館事業として多世代を対象に様々な視点で事業を実施されているようなことがとても重要になるので、今後とも取り組んでほしい。

○鈴木委員

専門分野の多文化共生の側面で話すと、これまであまり知られていないが、今後外国人が増えていく。外国人の方々が地域住民としてどのように参加していけるのか、住民同士の繋がりを作れるのが課題で、頼りになる人たちとつながれるように公民館が活用されていってほしい。

○濱野館長

定期講座のあり方、事業のあり方など、立場が違っていると見え方が違うなと感じた。これからの講座展開に活かしていきたい。

○福本館長

多文化共生においては今一番公民館から遠い存在となっているのは高齢者ではなく、外国人かもしれないので、そういった方も公民館に来てもらえるようにしたい。

○有吉館長

理想と現状との乖離はあるが、理想を忘れることはなく現実とのギャップを埋めていきたい。

○岸口館長

改めて公民館として何をすべきかを考えさせられるきっかけになった。多文化共生に加佐に移住してきた外国人に講座の講師をしてもらっている。中国人、シンガポール人。こういう事業を通して住民理解や文化理解も得られ、新たな担い手の発掘にもつながるので、続けていきたいと思う。

○川崎館長

コロナがきっかけでなくなった講座を復活させようとした時に、当時の担い手の方が高齢になって難しかったりしているので、新しい担い手を育てることが課題。

○岸本館長

餅つき、習字などの「日本の文化を外国人に教えよう」という意識だけではなく、外国人が講師となり「外国の文化を知る」ということも大事だと思う。
また、事業に人が集まらなないと館長はつらい。波多野委員にチラシのデータを送って、データを子どもたちに配ることはできるか？

○波多野委員

データでもよいが配れるものと配れないものがあり、民間がよくデータで送ってくるがそれはだめとしている。市の事業であれば大丈夫だと思う。コドモンで送れるが、保護者がデータを開くかどうかわからないということと、基本的に緊急時の連絡網なので、通常の広報媒体として使用できるかどうかは教育委員会と相談してほしい。チラシにして配る方が確実である。

○岸本館長

中筋だと人数が多いと600枚になる。

○渡辺委員

学級掲示はどうか？

○岸本館長

保護者の目に止まらないうと意味がない。

○波多野委員

配布に際して必要部数が足りない場合など、興味がある子が持ち帰りができるようにしている学校は結構ある。

○谷口委員

事業の広報はチラシにした方がよい。たくさん配っても来る人が少ないかもしれないが、そういう事業をやっているところがあるという啓発の意味では配り続ける方がよい。

また、公民館が子どもたちの居場所になっていて、そのような環境が代々受け継がれて来ているのが嬉しい。小中学生の友だちを作ろうと思うと、公民館に行けばよいと思う。そして、居場所として利用していた子どもが、大人になって運営側に回るような形は、とても長期戦だとは思いますが確実ではある。公民館にはどんな大人がいるのかを知って、その身近な大人に叱られながら、経験しながら、何かあった時は公民館に行ったらよいと思えることが大切だと思う。着実に変わりつつあることが嬉しい。

○福原委員

館運営だけでなく、事業も展開してくださっていて感謝している。最近は自分の広報としてはSNSと紙媒体が1番確実だと感じている。白黒でもよいので紙はあった方がよい。地域を知ることが大事だが、各公民館における地域性も加味してほしい。

中公民館で鉄道講座をする。鉄印を集めるということに特化した講座で、集まりが悪かったので対象範囲を広げた。定期講座に来られる方は比較的社交的な方が多いが、オタクは社会的に内向的な方が多い。なので、そういった方が公民館に来てもらえると新たな層が公民館に来てもらえるきっかけづくりになる。地域の場、学びの場としての公民館にしてほしい。

○江上委員

「チラシを配るのはどうしたらいい？」っていうのは地域を知る、つながるということの最小単位だと思った。こういったことを資料の最後にチップスとして載せたいのでまた何かあればご協力お願いします。

4.

1) 近畿地区社会教育研究大会（和歌山大会＝9/5）について

これからの社会教育のあり方を考える。福原会長、谷口委員、仲嶋が参加予定。

2) 日星高校 探究授業への参加について

（9月3日（水）5・6時間目）

日時を変更して9月17日5時間目、6時間目になった。

3) 次回の日程について

10月16日（木）もしくは23日（木）

次回の事例発表は、田中委員

5. 閉会